

---

# よくある？転生物語

趣味ット戦闘機

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

よくある？ 転生物語

### 【コード】

N9889S

### 【作者名】

趣味ット戦闘機

### 【あらすじ】

未完のまま打ち切りとなっています。

## 0話「プロローグ」（前書き）

前から一回小説を書いてみたかったので書き始めてみました。  
もしよかったら駄文ですが読んでいただけると（私が）喜びます。

## 0話「プロローグ」

5歳の頃、テレビで魔法を知り、憧れた。

8歳の頃、魔法は存在しないと言われ、信じなかった。

10歳の頃、魔法を探そうと決意し、笑われた。それでも探せる場所はすべてさがそうとした。

12歳の頃、ネットを使い始め、探せる範囲が莫大に広がった。学校にいる間は探せないの、必死に勉強して少しでも時間をつくろうとしたからかなり頭が良くなった。

現在14歳、学校に行きながらも魔法を探し続けた。

「もう帰るのか？」

「ああ、ちよつと捜し物をね」

「何回目だよそれ、何を探してるのかぐらい教えてくれたっていいじゃないか」

「見つかったら教えるよ」

「ってそれがなかったら完璧な奴なんだけどな……」

「褒めても何も出ないよ？」

「褒めてねえよバカ」

いつも通りの日常、魔法は未だに見つからない。

受験が近いこともあってもう諦めの気持ちができかけていた。

しかし心の奥ではまだあると信じている。

そんな時

「？」

急に体が中に浮いた、周りがスローモーションに見える。首を無理やり回すとトラックが見えた。

「（死ぬのか）」

何故か死ぬことに恐怖はなかった、もしかしたら考えるだけの時間がなかったのかもしれないし、魔法のない世界に飽きていたのかもしれない。深く考える時間はなく、俺はそのまま意識を手放した。

目を覚ますと、目の前に女性が立っていた

「気がついた？」

「……此処は？」

不思議な感じがする場所。

自分が立っているのか、浮いているのかも分からない。周りは見渡すかぎり白く、果ては見えない。

「貴方達から見たら天界の一部ってところかしら？」

「天界？」

「貴方、死んだのは覚えてるでしょう？」

「確か、トラックに轢かれて……」

詳しく思い出せない。家族の顔も、友だちの顔も、自分の名前さえも。

「そう、でも、貴方は選ばれたのよ」

「選ばれた？」

「いったい自分に何があったのか、何か特別なことをしたのだろうか。と、不安になる」

「そうよ、天界では毎年恒例の『適当に異世界に転生させて楽しみましょうルーレット』で運悪く選ばれてしまったのよ」

「それは果たして運が悪いというのか。それと同時に自分の中で神様のイメージが音を立てて崩れていくのが分かる。」

「それでね、折角だから面白くなるように幾つかプレゼントがあるのよ」

「なんですか？できれば魔法的な物がいいんですけど」

「ならびつたしね。転生先の世界には魔法があるの、だから別種の魔法の才能とその媒体となる本よ。」

「本は貴方から2メートル以上離れないようになってるから気をつけてね」

「本当ですか!?!」

「おそらく世界最強でしょうね、まあ素体が人間だから無理すると反動で死んじゃうからね?」

「……分かりました」

「本に簡単な説明が書いてあるわ。他の人には白紙にしか見えないから安心してね。じゃあそろそろ行ってらっしゃい?」

「転生先はどんな世界なんですか？」

「それを言っちゃったら面白くないじゃない！」

「じゃあ最後に、僕は一体そこで何をすればいいんですか？」

「強いて言えば、それは　らの　み　王　す　為

答えを聞く前に意識が薄れていった……



## 0話「プロローグ」(後書き)

更新はできるだけ早くしようと思いましたが名目上は不定期です。

もしよかったら感想をもらえるとありがたいです

## 1話「グリモア」(前書き)

この時点では主人公に名前はありませぬ。  
長文注意です。読まなくても大丈夫な人は大丈夫かも。

## 1話「グリモア」

「此処は……？」

あたりを見るとどこかの森のようだが、誰がどう見ても日本とは言わないだろう。

「ああそう言えば神様の意味不明な企画のせい……」

名前は聞かなかったが神様の言ったとおり手元には重畳そうないかにもといった黒い本があった。

「えっと……コレに書いてあるって言ってたよね……」

本を開こうとしたとき、本が自然に1メートルほど浮き上がり、話しかけてきた。

『初めまして、マスター』

「……は？」

『私はグリモア、魔導書です。アテナ様……マスターを転生させたものからメッセージがあります。』

【はじめに】

貴方が使える魔法の基礎は『顕現』と言うものです。顕現はあらゆるものを召喚できます。ただし道具は二十四時間、武器は三十分、

生物は十分という制限があります。制限に達したときは顕現したものは消えてしまうので注意してください。

【この世界の魔法について】

面白く無くなってしまうので詳しくは書きませんが顕現とは魔力の供給元が違うので資質も有無は分かりませんが、自分で勉強してください。因みに顕現の魔力供給元はグリモアです。

【グリモアについて】

グリモアは魔道書ですが確認した魔法や魔獣を解析してそれをページに載せる特殊なものです。こまめに確認するようにしてください。グリモアは貴方から2メートル以上離れないようになっていきます。詳しいことはグリモアに聞いてください。グリモアは魔法行使の補佐をする役目を持っているので魔法を使うときは極力触れているようにしてください。人間の体には限界があります。

【あなたの体について】

転生させるときに耐久力を上げておきました。心臓を刺されたぐらいいでは死なないし、腕を切られても魔法で直せるのでまず死にません。ただ痛いので注意してください。基本的に魔力は切れませんがグリモアがあっても素体は人間。反動はありません。

『とのことです』

「長いな……でも大体分かったよ」

『さすがマスターです』

「そんな大層な物じゃ無いよ……」

照れているのかポリポリと頭をかく。すると何かに気づいたように

「グリモア、僕の容姿ってどうなってる？」

『見た目は11歳、髪の毛の長さは男児としては少し長めの銀髪、目は赤と緑のオッドアイです。本である私には詳しいことは分かりません。黒っぽい服はおそらくこの世界のものと思われませう』

「アテナ……見た目も変えたのか……」

ついさつき知った名前をつぶやくが答えてくれるわけがなかった。

死んだときは14歳だったから年は少し下げているのだろう。しかし髪の色と眼の色がだいぶ変わっているようだ。

しかし服がこの世界の物になっているのはありがたい。元の服のままで怪しまれることだろう。

「にしても、まずはこの森から出ないとな……」

『マスター、試しに何か顕現してみては？丁度魔獣が出てきましたよ？』

見ると一メートルほどの青っぽい四足歩行の一角獣がこちらを睨みつけている。

「そうだね、『顕現：グングニル』！」

少量の光と共に手に槍が握られる。

「ハアツ！」

槍は一角獣の頭部に命中し手元に戻ってくる。一角獣は今の一撃で倒れたようだ。すると一角獣の体が光で包まれた。

「まだ何かあるの？」

光が消えた後には小さな光る石が残されていた。

『どうやらこの世界の魔獣というのは不完全な魔法生命体のようです。倒された後は魔石、その魔力を持った石のことです。魔石となり消滅します』

「ふん。魔石って僕には意味ないんでしょ？」

『いえ、おそらく売れば路銀になりますしこの世界の魔法も使うのなら必要になるはずですよ』

「じゃあ拾つとかなきゃね〜」

とりあえず何故か持ってた小さめのシヨルダーバッグにいれておく。

「じゃあ適当に森を抜けようか」

『そうですね』

本が浮いているというのはなかなかシュールな光景だがグリモアは少ししたら不可視の魔法で姿を消していた。



## 1話「グリモア」(後書き)

『グリモアのページ』

名称：グングニル

ランク：B (S~G)

効果：必ず的に命中し、敵を貫いた後手元に戻ってくる。

名称：プロトユニコーン

ランク：C

解説：少し青みがあった一角獣。名前のとおり馬に近い見た目をしている。

あっさりと倒したが並の魔道士だと苦戦するレベルの魔獣である。

ユニコーンと比べると小さく、ランクも低い



## 2話「名付け」(前書き)

今回は新キャラ登場、新キャラ視点です。

## 2話「名付け」

### 【Sideクリス】

クリスはワルドの森に来ていた。来月から魔法学校へ入学するといふこともあって少し体を動かそうと思ったのだ。この辺の森には強い魔獣も居ないという話なので一人だった。魔法は使えないがクリスも一応Gランク程度なら倒せるのだ。

「お、思ったより深いのね……」

この森は実はそんなに深いわけではない。しかし木が複雑に入り組み、直進することができない上にこの辺りは微妙な傾斜が多く見た目よりも多く歩いていたりと疲れが貯まりやすい。

「野外訓練のつもりだったけど、そろそろ帰ったほうが良さそうね」

クリスが森に入って一時間ほどが立っていた頃だった。しっかりと木に目印を付けていたので迷うことはないはずだ。

【十分後】

「はあ……はあ……っ！」

クリスは森を走っていた

「あんなのがいるなんて聞いてないわよ!？」

クリスの後ろには1メートルほどの蝙蝠が居た。見た目通り動きは遅いものの木の隙間を縫うように確実に追ってくる。

「（森を抜けるまでは結構あるし振りきれるとは思えない……倒すしか無いわ!）」

クリスの武器はショートソード、ロングソードより威力は落ちるがさすがに11歳の少女にロングソードは持てなかった。

しかし剣技は護身術程度。倒せるかどうかは分の悪いかけだった

突進してくる蝙蝠の下をしゃがんでぐり、そのまま腹を斬りつける

「通じないっ!??」

しかし頑丈な皮に阻まれほとんど通じていないようだった。

この後も翼、頭部、足を攻撃したが同じように弾かれた。

「（後は背中ね……）」

かなり消耗している、突進を避けられるのはせいぜい後2回ほど。蝙蝠も少し疲れているようだったが持久戦になったら間違いなくクリスがやられてしまうだろう。

蝙蝠がまた突進してくる

「一か八か……！！」

クリスは蝙蝠の背中に飛び乗った。もちろん蝙蝠も必死に振り落とそうとする。

「刺さって！」

半ば願いのようなものだった。これで効かなければ確実に負ける。クリスはそう思っていた。

ショートソードを振り下ろす。

「ガアアアアアアア！！??？」

蝙蝠が悲鳴を上げる。

「やっと刺さった！」

クリスはそのまます勝負をつけようとした

が

ドンッ!!

「っ!?!」

混乱した蝙蝠が木にぶつかってしまいその衝撃で振り落とされてしまったのだ。

蝙蝠はそのままクリスに止めを刺さんと突進してくる。

「こんな……ところで……」

もう蝙蝠の突進が当たるかといったところで

「グングニル!!」

声と共に槍のようなものが飛んできた。

「……え?」

見ると蝙蝠は既に魔石になる途中だった。

一体何がおこったのかわからない、クリスはそんな顔をしていた。

「大丈夫?」

見ると銀髪の優しそうな少年が立っていた。  
年齢は同じぐらいだろうか、今の槍は本当にこの少年が放ったのか  
疑問に思えるほどだ。

「え……あ、はい大丈夫です……痛っ！」

立ち上がるうとしたが振り落とされたときに足を撃つたのだろうか。  
かなり痛む。

「怪我してるの？グリモア、魔法で治せそう？」

『大丈夫そうですね、ただ詠唱が居ると思いますよ？見ながらい  
いですよ。』

「分かった、えーと……」

『起きて、精霊。僕の友達に祝福を』

……なんか恥ずかしいね、この呪文」

『マスターらしいですよ』

「嘘……」

少年はまるで当たり前のようになっているが治癒呪文なんて熟練の  
水使いじゃないと使えないはずだ。  
しかし現にクリスの傷は治っていく。

「君、名前はなんていうの？」

「……………」

「?まだどこか痛いのか?」

「……クリス・カールステッド、11歳よ、クリスでいいわ。貴方は?」

「僕は……あ」

「どうしたの?」

「名前が……無いんだ……」

「名前がないのか?」

「うん、よければ付けてもらえないかな?」

「え!?!……本当にいいの?」

「うん、いいよ」

「そう、じゃあ……ハルト!」

「うん、じゃあ改めて。僕はハルト、11歳だよ、よろしくね」

そういつてハルトはにっこりと微笑んだ。

「同年齢なのね、よろしくノノノ」

いったいハルトは何者なのか、魔獣を一撃で倒した上に治癒魔法まで使える。そんな少年が居ればすぐに話題になるだろう。しかしそんな話は聞いたことがない。しかも名前がないなんてどういう生ま

れなんだろう。

そういったいろいろな疑問が浮かんでくるが今は考えても仕方がない。とりあえず時間のあるときに聞いてみよう。

「ハルト、お礼をしたいから家に来てくれる？」

「いいの？わざわざありがとう」

「出口はこっちよ、付いて来て」

そうして私たちは私の家へ向かった



## 2話「名付け」（後書き）

### 【グリモアのページ】

名称：ジャンボバット

ランク：C

解説：見た目はそのまま巨大な蝙蝠、飛んでいるので背中を守りが薄い。例によって一撃で葬られたが本来は子供に倒せるような魔獣ではない。

### 3話「従者」（前書き）

修正がありました、前は2話です。今回は3話です。

前回の書き忘れです

#### 【グリモアのページ】

名称：ヒール

解説：治癒魔法の一種。大きな傷には効果が薄い。この世界の魔法とは違うものだが見た目も効果もあまり変わらないので見ただけでは分らない。詠唱はしなくても発動するがしたほうがイメージしやすく効果が高い。これはすべての魔法に共通する。因みに詠唱は使用者の性格が現れ、使用者の意思で詠唱は変わる。

基本的に何も書いてない場合ハルト視点です

### 3話「従者」

森で金髪ロングの小さな少女クリスを助けた後、僕たちは森を抜けようと歩いていた。

「ねえハルト、さっきの魔法は何て魔法なの？」

「え？えつと……」

まずい、まさか正直に言うわけにもいかないし……と、ハルトが悩んでいると。

『実は森で旅人の方に出会ったのですが、あの後何処かへ行っちゃったのです』

「本が喋った!?!」

『初めまして、クリスさん。グリモアです』

グリモアが助け舟を出してくれたが微妙に逆効果だったらしい。まあ魔法のことはごまかせたから当初の目的は達成している。

「グリモアは魔法の本だね。その旅人にもらったから僕も詳しいこととは分らないんだ」

もちろん嘘である。本当の事を話してもいいかもと思ったが変に目立つのはやめたほうがいいと判断した。

ハルトは見た目こそ11歳だが中身は14歳。多少の考えぐらいはあるし、普通の子よりも落ち着いている。

「そうなんだ、あ。そろそろつくわよ」

「クリス、グリモアの事はないしょにしておいてもらえる？」

「いいけど……確かに家の研究者に見せたら面倒くさそうね」

「ありがとう。グリモア、不可視モード。(……家の研究者?)」

『了解です』

そういつてグリモアは見えなくなった。

「本当に興味深いわね……」

どうやら完全に最初の魔法の事は忘れてくれたようだ。その後も他愛もない話をしながら歩いて行くが、ハルトにとっては貴重な情報源である。

まずこの世界には貴族、平民があつて平民は貴族に頭が上がらないらしいが、貴族が没落して平民になったり平民が大成功して貴族になったりすることも少なくないらしい。

そしてクリスがやけに熱を入れて話していたのが魔法学校のこと。魔法に興味のある人はここに入って魔法の勉強をするということだ。三期制でいたい12歳から15歳まで魔法を習うらしい。

10分ぐらい経つと城のようなものが見えてきた。するとクリスは当たり前のように城に入っていく。入っていいものか分らずハルト

がボーツとしていると

「ハルト、家についたわよ？」

「え……これって本当に家なの？城かと思ったよ」

「まあ間違いじゃないかもね。防衛施設も結構あるのよ」

それは間違いなく城だ、と突っ込みたかったハルトだが無駄だろうと思いやめておいた。

「クリスって貴族なの？」

「そうよ、カールステッド家は結構有名なのよ？」

「そうなんだ」

「……なんか反応薄いわね」

「そう？」

実際ハルトはどうも思っていない。貴族や平民なんて聞いたこと無かった実感がわかないだろうし。城も画像で見慣れてしまっている為新鮮味も薄い。

中に入ると使用人と思われる人達が出迎えてくれた。ハルトは一瞬何者だろうかといった視線で見られたがすぐにもとの仕事に戻っていった。

「ただいま」

「おかえりなさいクリスマス。」

「おかえり、その子は？」

「ハルトよ、森で助けてくれたの」

「初めまして、ハルトです」

「一応敬語は使えるだけの記憶はある。」

「また森へ行ったのか、無茶はするなといっただろう？」

「ごめんなさい……」

どうやら何回か森へ行っているらしい。クリスマスは父親とどこかへ行ってしまった。たぶんお説教だろう。ハルトは父親が行く時に母親と目配せあった気がしたのは気のせいだったかと思う。

「何処の子かしら？お礼をしに行かなくっちゃ」

クリスマスの両親はかなり人が良さそうな人だった。両親とも金髪で穏やかな顔つきをしている。クリスマスと違うところといえばかなり背が高いぐらいだ。

「あ……実は分らないんです。気がついたら森にいて、ここまで来ましたから……」

「そうなの？記憶喪失かしら……」

前の世界の記憶もかなり曖昧なもので正直役に立ちそうにないのにハルトは肯定した。

そう言うとクリスの母はハルトを観察しはじめた。ハルトとしては少し怖かったのだが少しするとクリスの母が

「ねえハルト、クリスのことどう思った？」

「え？……明るくて優しい子だと思いました」

とりあえず率直な感想を述べる。

「好きか嫌いかで言ったら？」

「…好きです」

さすがに少し恥ずかしいのか声が小さくなる。

「……合格！ハルト、貴方クリスの従者になりなさい！」

「へ？」

「本当は養子にしたいところんだけど国が文句言ってきたそうだから従者！」

「はあ……」

正直な所行くあてのないハルトにとってはありがたい事だったので

承諾しておく。

「じゃあ決まりね！来月から魔法学校が始まるけどその入学届けも出しておくわ」

「わかりました………？」

「ハルト、どうかしたの？」

ハルトが混乱しているとクリスが戻ってきたようだ。しかしハルトは答えられそうにないので母が代わりに答える。

「クリス、ハルトは今日からあなたの従者になったからよろしくしてあげてね？」

「………よろしくお願いします、クリス様？」

「なんで疑問形なのかしら………あとクリスでいいわよ」

ハルトはまだ混乱してるようで疑問形だったがクリスは父から聞いていたらしく特に驚いてはいないようだった。

「クリス、従者ってそんな簡単に決めていいの？」

やっと落ち着いてきたハルトはクリスにいくつか質問をする

「いいのよ。ハルトなら信頼できるし」

「クリスって貴族なんだよね？」



「これは私が答えるわね。カールステッド家はファラスカ…この国では一二を争う有名な名門なの。クリスはその一人娘ってことね。」  
そういつて母が答える。

その後も幾つか質問をしてクリスカ母が答えた。

とりあえず魔法学校は全寮制でしばらくはそこで過ごすこと。  
名門貴族の従者として恥ずかしい行動は慎むこと。

は別に気にしなくてもいい。  
2週間ほどは自由に行動していて構わない。

と言われた。あと給金は適当にくれるらしい。  
名門なのにずいぶんと自由な家だと思ったがハルトは言わないでおいた。

あるメイドの話だと話に入れてもらえない父が部屋の隅で丸まって  
いたそうなの。



### 3話「従者」（後書き）

#### 人物紹介

名前：ハルト

容姿：銀髪セミロング、身長高め

解説：転生してきた少年。ただ転生前の記憶はかなり曖昧で役に立たない。

今の世界とは全く違った魔法を行使することが出来るができるだけ隠している。

本人は気付いていないが結構美形。グリモアの所持者。

名前：クリス・カールステッド

容姿：金髪ロングで身長低め

解説：ファラスカの名門貴族、カールステッド家の一人娘。

明るい・元気・優しい、など絵に書いたような美少女でもある……

が、ハルトは全く気づいてない。

名前：クリスの母&クリスの父

容姿：クリスの親と人目で分かる感じ

解説：詳しいことは決まっていない

#### 4話「連絡」

ハルトはあの後母にいろいろ話された後、メイドに部屋へ案内されベッドで休息をとっていた。

（長い一日になったなあ……いや、まだ本番はここからかな？）

この世界について考え、どう過ごしていくかを考えなくてはならない。そう思うだけでハルトは疲れてしまっていた。いきなり異世界に飛ばされたのだから無理も無い話だ。

（確か養子にできるよう国に掛け合うと言ってたからここからは離れられないよね……）

少し考えると思いついたように

「そうだ、グリモア。何か分かったことはない？」

一応だが神からの贈り物のグリモアならなんとかなると思ったハルトだったが

『私は人格がありますが本来は本なので高度なことは分かりません』

「そう……」

希望をバツサリと切り捨てられたハルトはせめて使った魔法だけでも確認しておこうとグリモアを読み始める。

「そう言えば魔石なんて拾ってたっけ…」

クリスを助ける前にも何体か雑魚を倒していたのでポケットが重いと感じ始めていた。ハルトはいつか使うだろうと思いい部屋にあった机の中へ入れようとした時

「もしかして……」

何かを思いついたような顔をしたハルトは備え付けの紙を取り、これも備え付けの短剣で自分の指を傷つけ血で魔方陣を書き始めた。

「《顕現：携帯型空間圧縮靴》《ヒール》」

すると魔方陣の上に黒いウエストポーチが現れ指の傷がふさがった。

「おお、入る入る。結構何でも作れるんだね」

どうやら『いくらでも入る靴』といった感じのようだ。しかし入り口より大きい物はさすがに入らなかったし、あまり入れすぎても怪しまれるだけなのであくまでこっそり使うことにする。

魔石を圧縮空間へ放り込んだハルトはグリモアを読みながらだが改めて今後のことについて考え始める。

するとハルトはグリモアの最後のページになにか見つけたようだ。

「ねえグリモア、最後のページに知らない魔方陣が書いてあるんだけどこれ何？」

『本当ですか？ 私にも分かりません。おそらくアテナ様が書いたものだと思います』

「へえ……」

そういつてハルトは魔方陣を起動させようとする……と、勝手に魔方陣が光りだし、声が聞こえた。

『私よ、アテナ。元気にやってる？』

「……………通信用ですか？」

アテナは『まあね』と軽々しくいったが神と通信できる魔方陣というのはどうなのだろうかとハルトは思っていた。

『それにしてもいきなり名門貴族の令嬢に気に入られるなんて流石選ばれただけあるわね』

「……できれば選ばれなくなかったんですが」

嘘偽りのない本音かと言えば嘘になる。ハルト自身魔法が使えるということにかなり喜びを感じているし、あのまま死ぬのは呆気無いと思っていたからだ。

『まあ魔法学校では世界の基礎、常識とかもやってくれるみたいだから心配要らないわよ？』

「そうなんですか？」

それはかなりありがたい事だった。

自分の名前も思い出せないハルトの記憶は曖昧の一言に尽きる。前の世界の礼儀などは覚えていたが家族の名前は思い出せないなどこ

の世界で必要な知識だけを抜き取ったような感じだった。  
というハルトの考えを読まれてようで質問を擦る前に答えられた。

『そりゃ私がそうなるようにしたからね』

ということらしい。

もう啞然として声も出ないハルトだったがアテナは無視して話を続ける。

『流石にこれだけは知ってなきゃまずいっていう知識を今言っわね。』

一つ目、この世界は二大陸あって今いるのは南の大陸。北の大陸は未開の地で調査隊が戻ってきた試しはないそうよ。まあ私は何かあるか知ってるんだけどね。

二つ目、大陸の西半分が今いるイレギオンって国。無宗教国家ね。東半分がリライオンって国、こっちは宗教が強い国家ね。

三つ目、一番重要。宗教関係のこじれで二国間は今かなり緊張状態にあるってこと。

以上よ』

話の途中ぐらいで気がついたハルトだがあらかた把握したのか特に質問することもなかった。

『じゃあ私忙しいからこれで、何かあったらこうやって連絡するわ』

そういつて魔方陣から光が消えた。

「……なるようになるかな」

ハルトは完全に考えることを放棄した。

とりあえず北の大陸に何かがあるのか気になったが何か物騒な台詞があった気がしたので行くのはやめておこうと思ったようだ。

『マスター今日はもう遅いです』

部屋にあった時計を見ると既に12時を回っていた。11歳のこの体に夜更かしはキツイだろうと思いきえるのは明日にすることに決め眠りに付く。

「…おやすみ」

『おやすみなさい、マスター』



#### 4話「連絡」(後書き)

早速感想をいただきました。

ヨシユア13世様、ご飯はよく噛んで食べましょう様、ありがとうございます。  
ございます。

アドバイスはできるだけ活かすようにしていきたいとおもいます。

## 5話「実験」(前書き)

サブタイが不穏ですがそんなことはありません。

## 5話「実験」

早朝、目が醒めてしまったハルトは広間に居る母を見つけた。挨拶をする前にこちらに気づいたらしく早速、

「ハルト、昨日の夜中に養子にする申請が通ったから従者はやらなくていいわよ。それにしても何であんなに簡単に通ったのかしら……」  
いきなり従者を首になり息子になったことを告げられた。

(…アテナまたなにかやったのかな)

「分かった、じゃあ森に出かけてもいい？」

「……理由は聞かないから、無茶はしないでね？」

目的は魔法の練習だが言えるわけがない。言いたくなさそうなハルトの表情を読み取ったのか気をきかせてくれた。親としては良い部類に入るだろう。

「大丈夫だよ」

「まあクリスよりは強いみたいだし大丈夫かな」

本当は「クリスより」というより「誰よりも」なのだが母は知る由もない。

ハルトはこの後聞いたのだがクリスの剣の腕はそこらの戦士よりも上だそうだ。そう言えばあの蝙蝠もだいぶ弱っていたことを思い出

す。

(…天才って奴なのかな?)

【森】

ハルトは森のかなり奥まで入っていた。もちろん印を付けているので帰りに迷うようなことはない。

「さて…どれぐらい使えるのか試してみないと……」

ハルトがここまで来たのは自分の魔法がどれほどのものなのか試すためだった。もし強大すぎる力を加減なしで使ってしまったら周りはもちろん自分もどうなるか分かったものではない。

《顕現：カラドボルグ》

光と共に現れた剣を木に向けて軽く振る。剣というよりは大剣に近かった。

振った瞬間雷が木を焼ききった。というより一瞬で灰になったため消えた表現したほうが良かったかもしれない。

「グリモア、ランクは？」

『Aクラスです』

前回のグングニルがBだったから雷の特殊効果が評価されたのだらう。  
結果を聞いたハルトが次を顕現させる。

《顕現：レーヴァテイン》

また光と共にハルトの手に剣が現れる。

しかし今度は剣に見えるかも微妙。槍にも見えないこともないし、枝のようにも見える。

今度は木にむけて剣を振ろうとした瞬間木が砕けた。

不思議に思ったハルトが何回か試すが結果は同じだった。グリモアのページを確認してみると、

### 【グリモアのページ】

名称：カラドボルグ

ランク：A

解説：別名『硬い稲妻』、特殊効果は別名や神話によって決まるものと思われる。この場合は雷。

名称：レーヴァテイン

ランク：A

解説：剣であるがその刀身は槍にも矢にも枝にも見え、よく分らない。別名は『傷つける魔の杖』『害なす魔法の剣』など様々。

「グリモア、もしかしてページ書いてるのって……」

『私です』

「やっぱり……」

何故「思われる」なんて言葉が使われているのかと思ったが、それはグリモアにも分らないからだ。だがおそらく神話や別名で決まるというのは正しいのだろう。

その後、顕現以外にも属性魔法や防御魔法も試してみたが本気を出さない限り周りに甚大な被害がある、というわけではないようだった。

しかし何度やっても補助魔法ができなかった。グリモア曰く、

『マスターの魔法は「何かを出現させる」というものであって「何かを変える」ものではないからだと思えます。あと、気楽にやらずに本気になって顕現させればもっと強い武器が出ると思えます』

ということだった。

ハルトはすぐにそれなら補助効果のあるアクセサリを作ればいいと開き直っていた。

その後は適当に魔石を集め家に戻った。しかし強くてもせいぜいCランクだったので集まりは悪かった。

【家】

「ハルト、ちょっといいかしら？」

帰っていきなりハルトはクリスマスに話しかけられた、まるで待っていたかのように。

「あ、クリスマス。おはよう」

時間はまだ昼前。思ったより速く終わったためすぐに帰って来れたのだ。

「おはようじゃないわよ！ 朝部屋に行っても居ないと思ってお母さんに聞いたら森へ行ったって!？」

「え、いやお母さんの許可もとつたし…」

いきなりすごい剣幕で怒られていた。

ハルトは「部屋に行った」という不穏な言葉も耳に入っていないようだ。

「そういう問題じゃないの。森は危ないって昨日分らなかったの？もしかしたら昨日より強い魔物に出会うかもしれないでしょ？」

「それはそうだけど…」

「分かっているのなら行かないの、分かった？」

最後は笑いながら、すごくいい笑顔で言われたハルトは頷くしか無かった。

「全く…心配したんだから……」

「へ？ 何か言った？」

「な、何でもないわ！」

どうやらハルトには聞き取れなかったらしい。

……柱の陰から「孫の顔を見るのが楽しみだな……」と父がつぶやいていたのはだれも知らない。



## 5話「実験」(後書き)

基本的に神話の武器の能力はグリモアが説明したとおりです。ただし本気になるオ리지ナルのチート級武器と魔法を使い始める予定なのでそんなに種類は出てきません。

閑話「作者とキャラの駄弁り」（黒歴史決定）（前書き）

読まなくても大丈夫ですが読んだほうが分かりやすいかもしれないです

さ〓作者

は〓ハルト

く〓クリス

書いて後悔はしていませんが公開はしています

閑話「作者とキャラの駄弁り」（黒歴史決定）

は「なんでここに呼ばれたの？」

さ「一応序章が終わったから確認しておこうと思って」

く「序章って…6話しか無かったじゃない」

は「ほとんど僕的能力説明じゃなかった？」

さ「否定……できんっ！」

く「ショートソードはどこだったかしら」

は「水龍ぐらいなら死なないよね？」

さ「死ぬ！間違い無く死ぬ！」

【10分後】

さ「まさか生きてるとは……」

く「ところで私の能力ってどうなってるのかしら？」

さ「次の魔法学校編で出て来る」

は「僕のこっちの魔法の素質は？」

さ「次の魔法学校編で出て来る」

は「僕的能力はいつごろバレるの？」

さ「ねえなんでお前らネタバレになるような質問しかないの!?!」

「だってそれぐらいしか質問ないし」(のよ)「」

は「そもそも6話しか無いのに質問があるわけないよ」

く「ハルトの言うとおりのよ」

さ「むう…何も言えん……」

「」  
「」  
「帰ろうか」

さ「え、ちょっと?おーい!?!」

さ「速くハルトの能力で暴れさせたいです……」

閑話「作者とキャラの駄弁り」(黒歴史決定)(後書き)

次回から魔法学校編スタートです。

どんな感じになるかは気分によりますが、明るい方向で考えます。

## 6話「魔法学校」(前書き)

… 前回の閑話は自分でもひどいと思う。

因みに爵位は上から

公爵、侯爵、辺境伯、子爵、男爵  
です。

カールステッド家は公爵に当たります。

## 6話「魔法学校」

その後、常識を学んだり「物づくり」をしたりとあっという間に二週間で過ぎた。

因みに作ったのは力と守り、治癒力、俊敏性、気配察知を強化する腕輪を一つずつで計四つ。何れも黒と白が交わったようなデザインで両腕に二つずつはめている。実は一度に作ったため少し貧血気味になってしまったが『治癒力の腕輪』のおかげですぐに治った。その他にもいろいろ作ったのだが全て例のポーチに無造作に突っ込まれているようだった。

そして現在、ハルトは魔法学校の寮に行くところだった。

「ハルト、準備はできたかしら？」

「準備するものがないよ？」

「ふふっ、それもそうね」

実際ハルトの荷物といえばポーチぐらいしか無いため準備のしようがないのだ。家族にはポーチの効果を説明してあるので特に怪しまれるようなこともない。

「会えなくなるのは寂しいけどがんばってきてね」

「倒れない程度に頑張るんだぞ」

母、父の順。この二週間でハルトはすっかりこの世界に馴染んでい

た。

本人曰く、元々あまり記憶がなかったため特に不自由と思う場所がなかったから、らしい。誰が聞いたかは秘密だ。

「「いってきます」」

## 【魔法学校】

カールステッド家の屋敷から魔法学校まで半日近くかかった。名門



というのも考えものである。両親も街の近くに住みたいらしいのだが公爵家が街の近くに住んでいては下の者たちに示しがつかない、と王室に言われたそうだ。王室に逆らってまで住みたいという奴が居たら変わり者というレベルではない。

そして現在ハルトは馬車を帰し、魔法学校の前にたっている。ハルトは荷物がないので従者を連れる必要がないがクリスは衣服などいろいろなものを鞆に入れているので荷物持ちの従者を五人ほど連れている。

「…これ本当に学校なの？」

「ハルト、王城見たことないの？ 此処に比べたら何倍も大きいわよ？というかここからでも見えるわよ」

この町はフメルと違ってイレギオンの首都なので王城がある。確かに此処からでもその大きさが分かるほど巨大な城がそびえ立っていた。しかしハルトは遠くにあるものより近くの物に驚いてしまったようだ。

「なんかもついいや…」

「そう、なら早く寮に行くわよ。明日からさっそく授業が始まるしね」

内心これからもこんな感じなんだろうなあ…とつぶやいたハルトはもう驚かないと心に決めたのであった。

寮は門をくぐった右側にあり、女子寮と男子寮に分かれていた。管理室があるのか一階部分だけはつながっていたので建物としては一つなのだろう。寮部分も一階に3部屋という構造で区切られていて見ただけでも三百人分ぐらいはあるようだ。

部屋は一部屋一人という貴族らしい贅沢な作りになっていて無駄に広がった。一応服の類は数着残してクローゼットに収納した。本来は嗜好品などのせいでスペースを取るそうだがハルトは特に何もなかったのでずいぶんとスペースが余ってしまった。

「まあ…やることがないなあ……」

明日から授業が始まると言っても今日は何も無いのである。魔石の使い道でも考えようかと思っていたらコンツコンツ、というよりゴングンツという力強いノックが聞こえた。

「誰？」

見ると同じ年のはずなのに自分よりずいぶんと力強い体つきをした男が立っている。

「隣の部屋のエツイオ・アンフォッシだ、よろしくな」

「ああお隣さんね、僕はハルト・カールステッドだよ、よろしくね」  
するともう一人、頭の良さそうな男が割りこんできた。

「僕はヨハン、平民だ。隣の部屋だからよろしく」

ヨハンが自己紹介するとエツイオが怪訝な顔をした。

「平民なのに此処に通えるほど金があるのか？」

ハルトは忘れていたが此処、魔法学校の授業料はかなり高い。それこそ一介の平民の年収より遥かに高かったりするのだが、ヨハンは平民なのに此処に通うというのだ。

「平民の中では一番金持ちな家だろうね、でも今年は他にも結構平民がいるようだ。金がある平民は皆此処に来たがるものだよ。将来の役にもたつしね」

「そう言えばエツイオの家の爵位ってどれぐらいなの？」

「んあ？俺の家は最近辺境伯になったんだ、ってというか公爵家なのに把握してねえのか？」

「世間知らずなんだよ」

ハルトは公爵家も大変だなあとクリスを心配する。

こんな感じの会話を繰り返していると、

「君たち本当に貴族かい？いつも感じてる嫌な感じとかが全然ないよ」

とヨハンに聞かれた。ハルトは「本当に貴族だよ？」と返したがエツイオは、

「嫌な感じ？ ああ、貴族ってだけで奢ってるような奴等はいつか勝手に没落する。そしてお前のような家が新しく貴族になるんだ」と、かなり真面目に答えていた。

「そつなの？」

「…エツイオはまだ分かったけどハルトは本当に貴族かい？」

「養子だけどね」

この後少し雑談して皆部屋に戻った。

エツイオの家は騎士団の家系でそれには魔法も使えたほうが便利ということを通うらしい。実家を継ぐき満々である。

ヨハンは商人の子だが実家は長男が継ぐので実家の知識を活かして政務官を目指すらしい、こちらも魔法が使えたほうが優遇されるらしいのだ。

ハルトは公爵家の養子という珍しい立場にずいぶんと驚かれた。貴族が養子取るとは滅多にないことそうだ。自分は両親に気に入られたんだろうなあとハルトは改めて思う。

「皆結構考えてるんだなあ……」

早速友達ができたが皆が思ったよりきちんと考えて此処に来ているということに少し落ち込むハルトだった。



## 6話「魔法学校」（後書き）

魔法学校編スタートです。

因みに二人の名前はイタリア風です。

### 【登場人物紹介】

名前：エツイオ・アンフォッシ

容姿：緑髪で将来は屈強な戦士になるであろう体つき

解説：アンフォッシ家の長男で剣術に関しては既に並の傭兵より強いが年齢的に力の差で負けてしまう。豪快な性格で貴族っぽさはあんまりない。騎士団入を目指す。脳筋というわけではない。

名前：ヨハン

容姿：青髪で少し小さめ

解説：平民の子だが金持ちなので魔法学校に入学した。将来は一介の平民から大富豪になった実家の知識を活かして政務官になるうとしている。別に金持ちだから貴族というわけではないのだ。

## 7話「顔合わせ」

ハルトがエツイオとヨハンに会った次の日。

ハルト達3人はクリス達3人と授業前に顔合わせをしていた。

「ティアマト・バルバラ、子爵家。ティアでいいわ。特技は剣技で百合騎士志望よ」

黒髪ショートの子の身長の高い活発そうな女の子、といった感じ。百合騎士は女性騎士のことで騎士と比べると身体能力が低い為魔法の補助が重要となる。

「…エリカ・ハルベルト、侯爵家。志望は魔法軍軍師」

蒼髪セミロングの小さめの無口系でティアマトとは正反対な感じ。言うまでもないが魔法軍とは魔法使いが主力の軍隊のことである。

「クリス・カールステッド、知ってるとは思うけど公爵家よ。特に志望は決まってるわ。ハルトとは義理の姉弟になるわね。」

他の二人が続いてクリスも自己紹介をする。

この後男性陣が自己紹介をするのだがハルトはエツイオの様子が少しおかしいような気がした。

「（エツイオ、どうしたの？）」

「（ハルト、隣がお前でよかったよ…）」

「（え？いや、いきなりどうしたの…）」

鈍感なハルトだがいきなり肩を掴まれ感謝されても疑問に思うのが普通だろう。

「（ハルト、多分女性陣がすごく可愛いからだと思うんだけど）」

ハルトはヨハンに言われて女性陣をよく見てみるとたしかにそうかも知れないと思う。

ティアはまだ11歳とは思えないほど育ちが良く見た目14歳ぐらいいに見えるが決して老けては見えない。

エリカは服の上から分かるほど華奢な体でかなり整った顔立ちをしている。無口も特徴であることに代わりはない。

クリスも改めて見るとかなり可愛い部類に入る。身内鼻肩なしで。

「ハルト、どうかした？」

「いや、なんでもないよ」

ハルトが誤魔化すと同時にエツイオが自己紹介を始めていた。

「紹介が遅れたな。俺はエツイオ・アンフォツシ、辺境伯家だ。志望は騎士団、よろしくな」

「僕はヨハン。平民だけど学問なら誰にも負けない自信があるし、此処に通えるぐらいは金もあるよ。政務官志望、よろしく」

ヨハンが平民だということには特に驚かないらしい。女子寮にも何人が平民が居るのだろう。



「僕はハルト・カールステッド、クリスの義弟だよ。志望は特に無しだね、よろしく」

ハルト達は昨日と同じようにこの後雑談をしながら教室に向かっていった。

同じ教室らしく全員固まって座ることにした。

しばらくすると担任らしい教師が来て話し始めた。

因みにクラスは3クラスで1クラス33人。同じ階の3人は同じクラスに割り振られる。

#### 【地の文までハルト視点】

「さて皆さん、このクラス…Bクラスの担任することになったマルタ・ウィングスです3年間よろしくお願いします。基本的に同じ階の3人は組んで行動することになるので仲良くしてくださいね？」

なんか見た目いかにも教師って感じの女の人、言葉遣いはそうでもないけど。

緑髪って珍しいのかな？教室にいるのは金髪か黒髪、茶髪、蒼髪…銀髪も珍しいのか。

「早速ですが三年間の大まかな流れを話してしましましょうか。まず最初の一ヶ月でこの国の常識を学んでもらいます、簡単なもの

は物価から難しいことは神話まで。知っていることも多いと思います。すがしっかり学んでください。」

なるほど、これはありがたい。物価まで教えてくれるというのは流石上流階級の学校ってことかな。

…ん？神話って、ここ無宗教国家じゃなかったっけ？薄いつてだけで宗教はあるのかな？

「その後1年の間基礎魔法の練習です。基礎が終わったら応用に入ります。魔法の練習の合間に格闘技も入ります。魔法使いも体を鍛えなければいけませんからね。」

格闘技って剣術とか徒手格闘とかかな、槍術とかは分らないんだけど。

「では授業に入ります」

## 7話「顔合わせ」（後書き）

次から授業です。魔法学校編はあまり長くなりそうにはないですね、「今のところは」ですが。

今回はじめて「地の文までハルト視点」っていうのを使ってみたんですが短いので分かりにくかったかもしれないね。授業では地の文で書くことがハルトの感情ぐらいしか無いので使っていきたいと思います。

…まあ今までも客観的に書いてるようでもハルト視点で書いていたことがありますが気にしない方向で……

### 【人物紹介】

名前：ティアマト・バルバラ

容姿：黒髪ショート、活発系

解説：バルバラ家の次女。バルバラ家は商人が爵位を受けた家だが後次は長女がするので体を動かすのが好きなティアは百合騎士を目指している。

名前：エリカ・ハルベルト

容姿：蒼髪セミロングの小さい無口系

解説：ハルベルト家は代々魔法使いの家系だがエリカは体が小さいため戦闘員ではなく軍師を志望している。

名前：マルタ・ウィングス

容姿：いかにも教師って感じの緑髪

解説：Bクラスの担任。見た目とは違って結構気さくな人。

## 8話「授業風景其の壱」(前書き)

前回のあとがきにあった【地の文までハルト視点】は結局使わない方向になりました。慣れてない書き方はしないほうが良かったみたいですby下書き

ということでハルトの気持ちは○で表します。

## 8話「授業風景其の壱」

あれから2週間、ハルトはこの国の常識についてだいたい覚えていた。

そして今日の最初は神話の授業。国の始まりに関係があるという話なのでハルトとしては結構期待している。

「クリス、神話ってどんなの知ってる？」

今日の席順は左からハルト、クリス、ティア、エツィオ、ヨハン、エリカの順なのでハルトとクリスは話しやすい。というかマルチにバレない。

「確か昔現れた魔王を勇者が倒す。みたいな話じゃなかったかしら」  
ハルトはよくある話とは思いながらも重要であろうその情報をきいていた。

「その後何か人間の間で一悶着あったらしいけど詳しくは分らないわ」

クリスが知っている情報はそこまでで、一般に出回っている話ではこれ以上は知ることができない。授業ではもっと詳しい話をするよ  
うだ。

「はい、それでは授業を始めます。最初は神話の授業ですね、それでは神話を語るののでしっかり覚えてくださいね。」

ハルトがそんなことを考えてたら授業が始まった。

ノートと羽ペンを用意しなくてはいけない。この世界にはノートがある、ハルトはズいぶんと驚いた要だった。が作りは雑で紙も少し書きにくい。筆記用具が羽ペンということもあるのだが。

誰も一回の授業で覚えられたら苦労しないので皆ノートを取って復習するようにしている。しかも一回しか語らないので一度聞き逃すと友人達に見せてもらうしか無くなってしまふので集中しないと授業についていけなくなってしまう。そうになるとハルトも集中して受けなければならぬ。

集中しなければならぬのだが…

「遙か昔…という程でもないですがざつと三千年ほど前…」

（ちょっとまって、何その始まりは。神話ってもっと仰々しいものじゃなかったっけ？）

「この大陸……そう言えばこの大陸って名前ありませんよね、何ででしょうか…」

（マルタ先生…脱線する癖はいいけどさすがにひどくない？）

「ああまた脱線してしまいましたね。この大陸には名前もない一つの国しか無く、それは平和で豊かな国だったそうです。」

何分この担任の授業は集中しにくい、最初の方はかなり関係の無い話をしてしまうことが多いのだ。

「そしてその国は今よりも遙かに魔法が発達していたそうです。し

かし、ある時一人の賢者と呼ばれた魔法使いの作った魔法生命体が暴走を始めました。その暴走は賢者にも止められず、国は窮地に陥りました。」

(…確か魔獣も魔法生命体だったよね。っていうことは何？ あれって作れるの？)

「そして国の首都に指しかかろうとした時、一人の若者が一人で暴走した魔法生命体を討伐してしまいました。」

(なるほどね、その若者が勇者ってことね。それにしても一人で国より強いってすごいな…僕も人のこと言えないか…いや、勇者よりはましかな)

確かにハルトはその気になれば国一つぐらいならなんとかなるかもしれない。だが体はあくまで人間であり放出する魔力にもグリモアから吸収する魔力にも限界があるため体が壊れるだろう。

「一般にはこの後勇者は光の彼方に消え去ったとされていますが…」

(あ、やっぱり続きがあるんだ)

「問題は此処からです。ある人は勇者を『神の化身』として崇め。

またある人は勇者を『人間の英雄』として讃えました。

そして両派閥は次第に争うようになり、困惑した勇者は宥めるのが面倒になり前者に『精霊の力』を後者に『魔法の力』を記した本を渡しどこかへ消え去りました。

…この力に関しては魔法の授業の時に説明します。」

(そこは一つにまとめてよ！ そのせいで国が別れたんだけど!?)

「そして東のリライオン、西のイレギオンとして別れた国として復興し現在に至るわけです。」

(…神話にしては短い気もする、まだ探せば何かありそうだな)

「勇者の消えた先には諸説ありますがここまでの話は表現は違うもののどの資料もほぼ一致しています。では次はこの神話に関しての学者の様々な説を

### 【その後の休み時間】

「ねえハルト、さっきの神話って本当かな？」

休み時間になってそうそうクリスがハルトに話しかけている。周りにはティアに話しかけるエツイオ、授業について考察を話し合うヨハンとエリカという何時も通りの風景が出来上がっていた。

「もし本当なら勇者に文句言ってやらないといけないと思う」

「あ、やっぱり？」

「でも本当は勇者って何者だったのかな？」

「さあ？」



三千年も前のことが普通の文献に残っているはずもないので真相は  
だれも知らない

## 8話「授業風景其の壱」(後書き)

なんか今回めっちゃ短いですね。授業の一区切りだとしても短  
つくなってしまうのが悩みどころです。実技とかだといいんですけ  
どね…

## 9話「授業風景其の二」

さらに1週間が経過し、授業は魔法学に突入していた。

クラスの皆も待ちわびていたのか心なしか興奮しているように見えた。

もちろん、ハルト達も例外ではない。

「やっと魔法の授業に入るのか…」

「今までのも結構為になる授業だと思うけど？」

「ヨハン、ここって魔法学校でしょ？」

「…本番は此処から」

上からエツイオ、ヨハン、ティア、エリカである。

「皆楽しそうだね」

「待ちに待った魔法の授業だもの、しょうがないわ」

ハルトは自分で魔法を使えるしクリスの家にはお抱えの魔法使いが居たので興奮はするも他の生徒よりは落ち着いている。

「あれ？姉弟カップルはあんまり嬉しそうじゃないね？」

そんなハルト達を見てティアがからかい始めた。

「ゲホツ!!!?」

「待つて! その物凄く不本意極まりない呼び名は何!?!」

クリスが咳き込みハルトが弁解しようとするがクラス内では、

「え、本人に自覚なかったのか?」

「あの反応は照れ隠しでしょ?」

「近親婚なんて珍しくないしねえ」

「ハルトとの奴羨ましい...」

「来年にでも結婚するんじゃない?」

「いや、卒業まではしないだろう」

等すでに周知の事実のように扱われていた。

因みに放課後に大きめの怪我をした生徒が居たらしい。

「? 今日はいつもより騒がしいですね。ハルト君、何かあったんですか?」

「先生! 早く授業を始めてください!」

マルタが教室に入ってきたのでハルトは早くこの状況から脱出するべく授業の開始を促す。

「はあ... まあいいです。始めますよ

弁解するハルトを見てクリスは少し残念そうにしていたがハルトは気づいていない上に周りは気づいていてさらに噂が広まるという悪

循環になっていた。

## 【授業開始】

「今日は魔法実習の前に魔法の基礎理論を学んでもらいます。まずは『精霊術』と『魔法』の違いについてです。精霊術は東のリライオンで使われている、精霊と契約してその力行使すること。魔法はこの国で使われる自らの魔力を媒介にして発動する力のことです」

（ええと…精霊と契約するのが精霊術で、自分の魔力を使うのが魔法ってことかな）

「国で別の方法が使われるのは勇者が与えた力の違い、ということになっていて、神話の授業であつた『力』」がこれに当たると思われています」

（何故に疑問形？）

「精霊術と魔術の一番の違いは先ほど言ったことです。双方に特徴があり、精霊術は個人では炎、水、風、土の内1属性しか使えないのに対し魔法は全属性を得意不得意はあるものの個人で使いことができます。ただし、魔法より精霊術のほうが威力が高いものが多いです…精霊術については多く学ぶ必要もないですね」

（…多分精霊術も『効果を顕現させる』ことで使えるんだろうなあ）

ハルトの使えないと思っていた補助魔法は『効果を顕現させる』と

いう概念のもと使えるということが分かったので実質ハルトに使えない魔法はなかった。

「魔法は魔方陣を展開、構築、発動することで使うことができます。実際に見たほうが早いと思いますので注目してください」

そういうとマルタは窓の外に向かい指を向ける。

するとマルタの指先に拳大の円が現れ簡単な模様が入った後、そこから火球が発射された。

「今は分かりやすくするために遅くしましたが実際の戦闘だと相手は態々待つてくれないのである程度距離が必要となります。そのために格闘技を学ばわけですが、身体強化の魔法とかもあるので普通にやるよりははるかに楽でしょうね」

(楽って言うか身体強化してたら技術なくても大丈夫じゃない?)

「魔方陣を構築するときの模様で魔法の中身が決まるので人によって使う魔法は様々です。初歩魔法は同じ魔法を使っている人がいると思いますが中級や上級になると基本的にオリジナルになるので名前が残るような魔法を作ってくださいね」

(真似はできるのかな? ああでも一瞬じゃあ魔方陣見えないか)

「では魔方陣の模様について説明していきます」

## 9 話「授業風景其の二」(後書き)

今回は多分実技の授業。模様に関しては戦闘描写で出て来るかもです

## 10話「魔法能力判定試験」(前書き)

5月17日、0話の最後の3行を書き換えました。大して変わってないし直接物語に関係するわけではないので軽く確認する程度で大丈夫だと思います。



## 10話「魔法能力判定試験」

魔法学校入学から半年、今年の新入生は出来がよいらしく殆どの者が落ちこぼれること無く授業が進んでいった。

今日は魔法能力判定試験。要するにどれだけの魔力を持っているか、得意な属性はなにかを判定する日である。

「はいそれでは説明をするので並んでください。」

マルタの号令でBクラスの生徒が整列する。

今でこそ当たり前のようにやっているが最初の方は貴族を中心に並ぶ順番でもめていたものだ。

「魔力判定はコモン、レア、スーパー、ウルトラ、マスターの五段階で判定されます。皆さんはまだ一年生ですのでコモン強くてレアと言ったところでしょう。試験内容は五つあるのにそれぞれ無属性と四大属性の魔弾を最大威力で当てるだけです」

(…本気でやったらマズイかな)

と、ハルト。

(属性魔法ってあんまり得意じゃないのよね…)

これはクリス。

(…近接のほうが得意なのに…)

エツイオとティア。

（（問題ないな））

ヨハンとエリカ、といったように心配する場所は人によって違うよ  
うだ。

先ほどマルタは「最大威力で」といったがハルトがそんなことをす  
ればどうなるか分かったものではないし、エツイオとティアは逆に  
近接戦闘のほうが得意。といった惨状だ。それにくらべエツイオと  
ティアは堅実に訓練を重ね、問題なく優秀であった。クリスだけは  
特殊で無属性魔法は他者を逸脱しているのに属性魔法はギリギリと  
いう今までに例のない能力を持っている。

「それでは前の人から始めてください

マルタの号令で試験が始まった。

ファイアーバレット  
「炎弾！」

マジックバレット  
「魔弾！」

アースバレット  
「土弾！」

生徒の掛け声が校舎に反響し魔法が的に当たる音が響く。

「では次の二人！」

「…不調なし」

「昨日早く寝てよかったと思うよ」

ヨハンとエリカの番が回ってきた。二人とも好調らしく堂々と振舞っている。

ウォーターバレット

「…水弾」

ウインドバレット

「風弾！」

二人の指から魔方陣が現れ弾が的に当たる。

「威力は互角つてところかな」

「…あの的つて壊れないの？」

「確かに木製なのにこれだけ打って壊れないって言うのは不自然だね」

実は標的の的は木製なのにまだ一度も壊れていない。コモンレベルの魔法とはいえこれだけの数を打っているのだからもう壊れないほうが不自然だ。

「ああ、あの的は魔法でスーパー以下の魔法では壊れないようになっています。コモンとレアは見た目で分かりますし、スーパーも滅多に居ないですしね」

「あ、先生。そうなんですか」

「…納得した」

「終わったのなら次の二人出てきてください」



## 10話「魔法能力判定試験」(後書き)

次回は残りの四人分の試験です。

感想への返信機能。今日知りました……作者は馬鹿ですがこれから  
もよろしくお願いします。

## 11話「光の使い手」

「残ったのはハルト君とクリスさんだけですな」

既にハルトとクリス以外は試験を終え、寮に帰っている。

因みにいつもの4人は全員レア判定という優秀な成績を残していた。

「やっと順番が回ってきたわね…」

「最後でいいとは言ったけどまさかこんなに待つなんて…」

試験が始まったのは午後2時、現在時刻は午後5時。実に3時間も経っている。的は6人分しか無い上に魔法の発動まで時間のかかる生徒も多い為時間がかかるのだ。

「始めてください」

「了解です」

この場に居るのは二人とマルタのみ、他のクラスの教師も早めに帰っていて、珍しく他の4人も先に帰っている。そのためゆっくりしたところで問題はない。

「クリスからやっていいよ、どうせ遅いんだし一人ずつやろう」

「分かったわ。それじゃあお先に…」

クリスが的に指を向け、指先に魔方陣が展開される。だが先程まで見ていたものより少し小さい。

「ファイアーバレット  
ウォーターバレット  
炎弾！、水弾！」

「やっぱり属性弾は苦手なんだね」

無属性意外を打ち終えたクリスにハルトが話しかける。

「無属性は得意なんだけどね……」

「貴方：今なんて言った？」

クリスが属性弾が苦手なのは6人内では周知の事実だったがマルタは知らなかったようだ。

「え、いや無属性が得意と……何かあるんですか？」

「……的に打つてみて」

さっきクリスが打った属性弾は全てコモン級、発動までそれほど時間がかからなかったことを考えれば優秀とまではいかなくとも普通だった。

「分かりました……」

クリスが的に指を向け、魔方陣が展開される。だが先程の魔方陣が拳大に小さかったのに対し今度は1メートルほどもある。

マジックバレット  
「魔弾！」

放たれた魔弾は的に命中しそれを粉々に砕いた後魔力が拡散し消えていった。

「…そういえばクリスの本気って見たことなかったね」

「…ウルトラ級…いやそこじゃない！」

本来この試験はどれほどの素質があるかを自ら知るためのテストであり普通はレア以上が出ることはない。マスターの素質を持った者が居ればスーパ―を出す、程度のものだ。現に今まではウルトラ以上が出たことはない。

ハルトは自分の力がある為驚きというよりは感嘆だった。

マルタは驚きだがハルトと達には意味の分からない言葉を口にした。

「光…の使い手が現れた!？」

「…は？」

「光…ですか？」

「…ここでは話せないなのでハルト君の部屋に行きましょう。残りの4人も呼んでください」

「なんで僕の部屋なんですか……」

「広いからじゃない？」



## 【ハルトの部屋】

試験の後、ハルトの部屋にはいつもの6人が集められていた。少し雑談をした後、マルタが本題を口にした。

「これから話すことは絶対に他の人に話してはいけませんよ」

全員が了解と頷く事を確認するとマルタは続きを話します。

「まず今回問題になっているのはクリスさんの属性です。試験が終わりエツイオ君は炎、ヨハンくんは風、エリカさんは水、ティアマトさんは土、といったように属性が分かりましたね？」

「土は補助がしやすいから調度いいと思っただわ」

「やっぱり攻撃力の炎だよな！」

「…水は治療と広範囲攻撃に役立つ」

「風を使って書類整理とかできたら便利そうだね」

「あれ？ そう言えば僕試験受けてないよね？」

「もつ的是片付けてしまったのでハルト君は私が直接見ることにします」

「ありがとうございます」

「…話をもとに戻します。問題はクリスさんの属性なんですが、おそらく光です。皆さんは知らないかもしれませんが無属性というのは本来光属性と呼ばれるべきものです。かつての勇者は特に光を得意としていましたが今まで勇者以外に得意な人物がおらず、時代の流れと共に無属性と名前が変わってしまいました。以降光は勇者の属性とされました」

「なんで先生はそんなこと知ってたんだ？」

「エツイオ君の疑問も確かにそうですね。この話は一部のマスタークラスの魔法使いに極秘で口伝えられているもので次代の勇者が現れたときに補佐するための情報です」

「…私達に話してよかったの？」

「魔法学校の3人組はこういう事態の時のためにあるんですよ。突然「貴方が勇者です」って言われても困るでしょう？ 相談役みたいなものなのよ」

今の説明で全員納得したようだがハルトだけはまだ疑問を持っていた。

「先生、もしかして魔王は……」

その場に居た全員が固まった。それは最悪のパターンだったからだ。特にマルタは疑問が多かった。

何故こんなに若い少年がここまで鋭いのか。この少年は貴族の養子

という極めて珍しい身分だ。それ以前の経歴は一切の事が分からない。この少年は何者なのかと。

「…隠しておくつもりだったのですが仕方ないですね。」

全員声を出せないままマルタが真実を告げる。

「光の使い手…勇者が現れたということは闇の使い手である魔王もまた何処かに現れているはずです」

三千年前の御伽話でしか無かった戦争が始まるのか。全員がそう思った。

だが心配はそれだけではない、皆を代表するようにティアが聞く。

「じゃあクリスは魔王と戦う運命にあるってことですか!？」

勇者　　そう聞けば誰もが魔王と戦い世界を救う者と答えるだろう。

しかしそれは過酷でとても12歳の少女のすることではない。

「今、魔王が現れたって言う報告はないわ。現に魔獣は居ても魔物は居ないわ」

「じゃあ…」

ティアは少し安心したようだった。しかしマルタはこう続けた。

「でも多分戦うことになるのは人間よ。それもリライオンの…あの国は国民は普通でも上層部が勇者の狂信者のような物なの。勇者がこの国に現れたなんて聞いたら…」

全員が絶句した。

それは魔王と戦うといった問題ではない。

「…少なくとも、卒業までは隠しておきなさい。ハルト君、明日試験をするから授業が終わったら私のところに来て」

そう言ってマルタは部屋を出て行った。

その後は皆、しばらくうつむいて何かを考えていた

11話「光の使い手」(後書き)

エツィオとティアマトのシーン無いですね。可愛いそうに。

明るい方向で行きたかったんですけど思ったより早く暗くなった気がします。

まあでもしばらくは明るいですよ。

PV10000突破記念の雑談(黒歴史?) (前書き)

は〓ハルト、く〓クリス、え〓エツイオ、よ〓ヨハン、て〓ティア、  
えり〓エリカ  
さ〓作者

PV10000突破記念の雑談(黒歴史?)

は「まさかまたあの黒歴史するの?」

え、よ、て、えり「ハルト、黒歴史って何?」

く「ああ…そう言えばみんなは居なかったんだっけ」

さ「五月蠅い! キャラが少なかったんだからしょうがないだろ!」

よ「無計画なだけじゃないの?」

えり「…馬鹿?」

て「今回は大丈夫なの?」

え「馬鹿だな」

さ「エツイオだけには言われたくないな…」

え「どういう意味だ!?」

一同「それもそうか(ね)」

え「……………」

【ちょっとして】

は「今回は結局なんなの？」

さ「PV10000突破記念だ！」

く「確かもう片方の小説がこっちの2倍ぐらいのペースで追いついて無かったかしら」

て「あれは確かこっちを書いてたら妄想が止まらないってことで始めたんじゃない？」

よ「いやそれがこっちは一作目、あつちは一応二作目ってことで1話のクオリティがぜんぜん違うんだよ。それで」

え「本当にこの企画いるのか？」

さ「次からこの企画辞めようか……」

えり「…それはそれで暇」

は「逃げるの？」

さ「言いたい放題だな！」

く「そろそろやることもなくなってきたわね」



さ「まだ5分も経ってないだろ」

は「此処にいても暇だしね」

さ「言いたい放題だったのは誰だ」

え「何しに来たんだっけ？」

さ「お前は呼んでない」

えり「…馬鹿」

さ「何なの？　ねえお前ら何なの？」

て「帰るか」

一同「さらばー！」

さ「え、あ、ちょ、おーい……」

さ「本当に帰りやがった…」

ええと、改めて読んでくれた皆さんありがとうございます。

こんな小説ですがお気に入りに入れてくれている人がいることに感動です。多分この小説を書き終える時以上に感動してる気がします。

長く続きそうな雰囲気ですがそこまで長く続くというわけでは…予定では有りません。それでも結構かかりそうです。

それではこれからもどうぞよろしくお願いします。」

## 12話「野外授業其の壱」

試験からさらに半年。ハルト達は問題なく進級し2年生となり、最初の授業を受けた。

「今日から2年生になったので野外授業が始まります。最初は自分がどれほどできるのかを確認する意味も込めて簡単なものになっています。グループは事前に決めておいた男女三人ずつになっていますね？ それでは森に向かいますが途中で体調が悪くなった人や怪我をした人はすぐに近くの教員に知らせてください」

この言葉通り最初の野外授業はかなり簡単なものだった。

どちらかと言えば森の雰囲気慣れる為、と言った授業で目的地も浅い部分にあった。

目的地には教員が野営しており証拠となる物を持って学校に帰るというものだ。

2回目は教員の引率はなく、完全に6人での行動だったがそれでも野宿をするようなことはなかった。

生徒はこの野外授業の合間に応用魔法の指導を受け、暇なときに練習する。なので生徒たちの間ではまだ2年になって一ヶ月だというのにだいぶ実力差や個性が出てきている。

威力を出す。それだけでも幾つかの方法がある。

純粹に魔方阵に魔力を注いで魔方阵を大きくする方法もあれば時間は掛かるものの詠唱をして威力を増幅させることも出来る。他にも魔方阵に描く模様を工夫し、効率よく魔力を使う方法もある。

教員は生徒の魔法に関しては「教えられるところは教えるが個性で済まされる範囲は知らない」と言った感じなので完全に個人の才能努力の差だった。

そんな中ハルト達6人は最近『ハルトファミリー』という名前をつけられた。

これは一種の畏敬の対象であり、その原因は全員が実践的な模擬戦ではその辺の魔法使いにも劣らない程の実力を持っていることが挙げられる。ハルトの名前が付いているのはリーダー格がハルトだからである。

中でもハルトとクリスには二つ名がついており、

すべての属性が得意な『属性のハルト』

無属性を得意とする『無のクリス』

クリスは本当は光なのだが言うわけにもいかず、かと言って隠しておくのも無理なのでこのような名前が付いている。

ハルトはそもそも使っている魔法が違うので得意も何も無いが説明するわけにもいかずこうなっている。

クリスが勇者であるということは一部のマスターしか知らない事なので生徒たちはもちろん教員も知らない人のほうが多い。国家機密レベルで緘口令が敷かれている。実際国家機密だが。

そして今日は三回目の野外授業。

2年になってから半年。殆どの生徒が応用魔法を覚え実践も出来る

ようになっていた。

「今回の野外授業は前回までとは違いこの森の深部まで行ってもらいます。その為森で野宿することになります。が教員の引率はありません。万が一の時には助けに行きますが必ず助けられるという保証もありません。心して受けてください」

ハルト達が出発するのは最初なので既に準備を終えている。

「先生、確認お願いします」

「はい。ハルトファミリーですね」

「先生までその呼び名使ってますか…」

「その方が分かりやすいじゃないですか」

まあ…いいですけど…とハルトが渋々納得する。

「では出発してください」

「了解です」「了解です」「了解です」

全員で返事をした後、森に向けて出発する。

野外授業の目的は魔獣との戦闘による実践訓練と旅慣れ。元々この森にはそこまで強い魔物は居ないため6人いれば大体対処できる。…はず。

### 13話「野外授業其の二」

【初日】

「エツイオ！ そっち行つたわよ！」

「応っ！」

「エリカ、準備は終わってる？」

「…問題ない」

「ハルト、同時にいくわよ？」

「せーのっ！」

野外授業開始から4時間、ハルトファミリーの戦闘回数は既に10回を超えていた。

G・Eランク主体とはいえ数が多ければそれなりに時間がかかる。全員それなりに消耗していた。

「なんでこう数が多いかな」

「何でも先生たちが態々このために増やしてるらしいわよ」

ハルトの質問にティアが答える。何故かティアはこう言った噂や不確かな情報について詳しい。本人曰く「普通」だそうだ。

「…食料は大丈夫？」

「無事、その辺に果物とかもあるし問題ない」

「ティア、魔力は未だあるか？」  
「ちよつとキツイかも。こういう時はエツイオが羨ましいわ」

戦闘後の周辺確認もこれで何回目だろうか。魔力が切れかけたら戦闘で手に入れた魔石で回復する。野宿をすることになるから食料も持ち込み分だけでは足りずに辺りの木の実や果物、動物などを採ったりしている。

「後どれぐらいで着くのかしら」

「地図的にはあと6時間ぐらい歩いたら目的地だよ。今日はあと2時間ぐらい歩けばいいかな」

「そつ、なら早くいい」

「あ、ちよつと置いてかないで」

なんだかんだで結構余裕で歩みをすすめるハルトファミリーだった。

1時間半ほど歩いたところでハルト達は少しひらけた場所に出た。

そろそろ野営する場所を探さなければいけなかったので丁度たどり着いた場所に野宿することにした。

「まさか貴族って身分で野宿することになるとは思わなかったぜ」

焼いた野うさぎにかぶりつきながらエツイオが言う。「この森には野うさぎが居たのでエツイオが狩って来たのだ。」

「その台詞、もう少し貴族らしく食べながら言ってくれないかしら？」

「クリス、寝ながら食べながら言っても説得力無いぞ」

「いいじゃない別に、堅苦しい食べ方するより何倍もいいわ。それにハルトなんて食べながらまた次の果物採ってるわよ？」

クリスは寝て食べながら、エツイオは豪快に食べながら、ハルトに至っては食べてまたすぐに次食べるものを探している。

「何と言うか…本当にあの3人は貴族なのか？」

「…微妙」

「傲慢なのよりは万倍いいんじゃない？」

他の3人はいたって普通に、大人しく食べながら行儀の悪い3人を眺めていた。

## 【2日目】



「全然魔獣が居ないじゃない」

「逆に不気味だな…」

2日目、そろそろ歩き始めて4時間、全く魔獣と遭遇しない。

「もしかしてあの小屋が目的地じゃない？」

クリスが指さした先には見難いが少し大きめの木造の小屋が見える。

「え…でもあれって…」

「まずくないか…」

ハルトとエツイオは視力が良いらしく此処からでも小屋の様子が見えた。

5分もせずにハルトファミリーは小屋についた。が

「嘘でしょ…」

「…非常事態」

「誰か、通信術式を使えないか！」

そこにあつたのは小屋、だが決して人の住める状態に非ず。おそらく魔獣にでも襲われたのだろう。だが此処には教員が待機しているはずだった。

「君たち…ハルトファミリーだね……」

瓦礫の下から声がした。そこにはぼろぼろになった教員が転がっていた。

「先生！ 何があつたんですか!？」

「オークだ…オークの群れが居る…奴…等は頭が回らない…からな…運よく…生き残れたよ……」

かなり消耗しているようである言葉がたまに途切れている。

「すぐに治療を！ 《『此者は味方、精霊よ治療せよ』ヒール》！」

クリスの時と詠唱が変わっているのは状況の違いか、それとも心境の変化か。どちらにせよハルトが少しずつ成長していることに変わりはない。教員の傷は見る間に治っていった。

教員は詠唱をしたとはいえ2年生でここまでの治療術を使えることに驚いていたがすぐにエリカの声にかき消された。

「…っ！ 緊急、オークの群れが来た！」

「早っ!? エツイオとティアは前衛！ エリカとヨハンは補助に回って！ クリスと僕で殲滅するよ！」

「……了解!」「…」

ハルトファミリー初のVS高ランク集団戦闘が始まった。

### 13話「野外授業其の二」(後書き)

#### 【グリモアのページ】

名称：魔弾類

ランク：G

効果：魔力の塊を撃ち出す魔法。初歩中の初歩。属性によって色が変わる。

名称：オーク

ランク：B～A

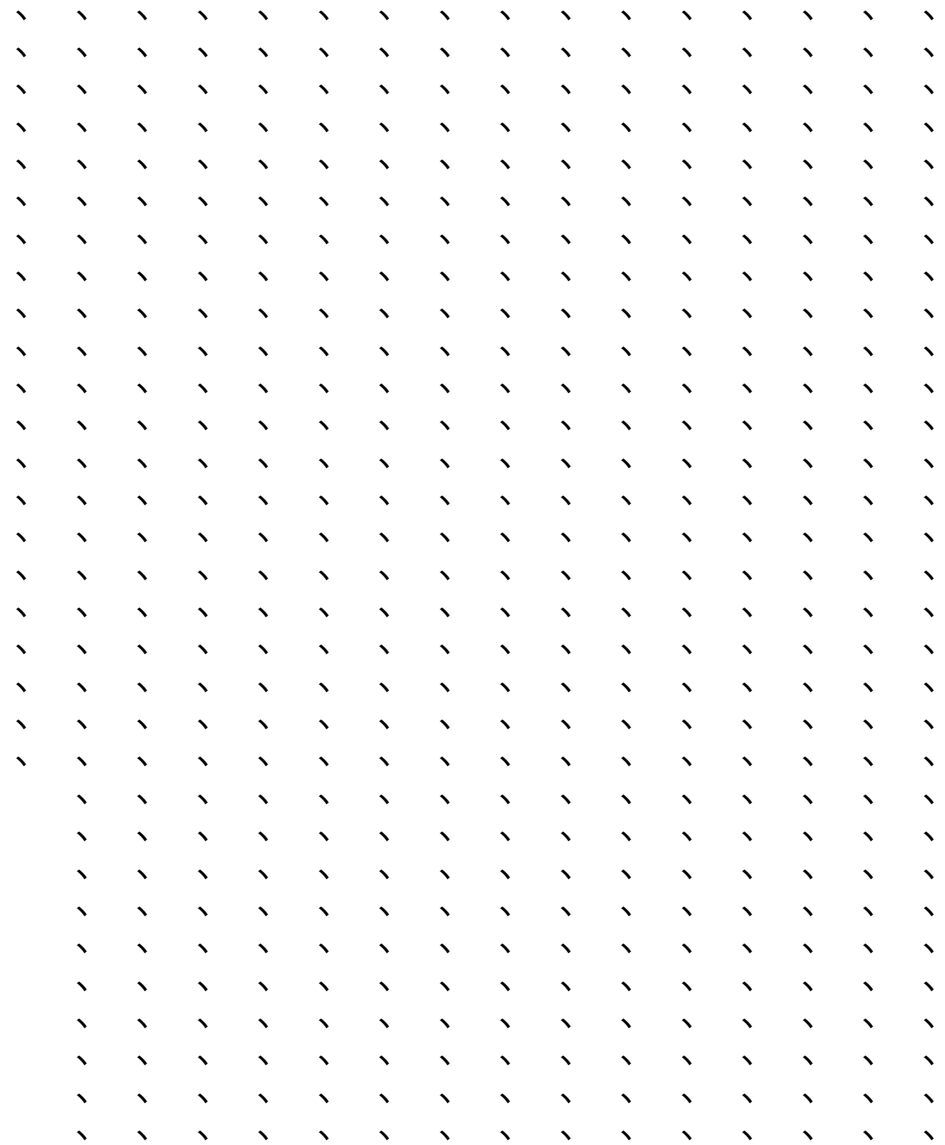
解説：2メートル程の人形魔獣。猪と人をかけ合わせた感じの醜悪な見た目で怪力を持つ。集団で行動し、数が揃ったときはSランクにも劣らないほど手ごわい。個体によって強さが違う。

## お詫びと報告

この度「原作者になろう大賞」応募するため、そちらに時間をとろうと思いい誠に勝手ながらこの小説を打ち切ることになりました。

読んでくださっていた方々には大変申し訳ありませんがご了承の方、よろしくお願い致します。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9889s/>

---

よくある？ 転生物語

2011年5月31日17時55分発行